

障害者の地域生活の推進に関する検討会
重度訪問介護の対象拡大について ～精神障害者を抱える家族の意見書～
全国精神保健福祉会 飯塚 壽美

9月11日の貴重な会議において、限られた時間の中で皆様にきちんとご理解いただけるような発言が出来ませんでした。今回改めて、精神障害者の日々の辛さをご理解いただく好機として、意見を述べたいと思います。

「本人はなかなか病識が持てない」これは全員に当てはまる事ではないため、訂正いたします。

- ①精神障害を有する人は、病識を持ちにくい時がある
- ②精神障害を持つ人は、新しいことに不安を感じる事が多い
- ③精神障害を持つ人は、自分で生活の枠組みを作りにくい場合がある
- ④精神障害を持つ人は、日常生活のしづらさを抱えている事がある

～引きこもりに深く関わってきた白石弘巳医師の資料から～
また、「将来への希望」が描けないことへの焦燥、絶望も出てきます。

病識を持ちにくい時とは、病気の初期によく見られ、医療機関から十分な病気に対する説明を受けていない場合や、判断する機能に障害が起きる事から生じるものと思われれます。十分な日時をかけて説明をする姿勢で、信頼のおける方からの親切丁寧な、本人が心を開く対応を必要とし、徐々に病気を受け入れて、薬物などの治療に納得する傾向が有ります。そのことがまず回復につながる重要な事と思います。

社会参加が出来ない、働けない、ふがいない自分を恥じ過ぎるほどに恥じて、傍で見ている者が哀しくなるほどに自己を責め追い込み、心がかんじがらめになっている場合も多いです。外部からは、家族が抱え込んでいて、そこに介入するのは難しいと思われがちですが、家族もそのように苦しむ本人を前にして、本人と共に立ちすくんでいるのです。この状況で、自ら医療機関に赴く事ができない場合には、その家庭を訪問して、家庭内での病状や生活状況を様々な角度から把握して、忍耐強く関わり続ける支援体制を取り、心の窓を開く対応を期待します。

家庭内で最悪な状況とは、本人が発病して治療につながるまでの間、または長期間の療養生活に疲れた揚句、“いつまでも薬を飲んでから治らない”というような、本末転倒の考えがわいてきて、服薬中断をして再燃した場合です。

その場合に、納得しない入院の経験があると一層、家族を恨む気持ちが復活し、イライラから家族に当たり、そのような場合には、家族は尋常ならぬ険悪な厳しい状況に置かれます。

これが在宅精神障害者を抱える家族にとって、一番厳しい状況であり、外部からの訪問による支援が求められるところです。このような場合は、失敗が許されない緊急対応が求められ、家族にも支援が必要です。不安や異常な感覚にさいなまされ混乱した場合には、重度行動障害と判断して、重度訪問介護の対象として下さい。これまでは、このような状況に置かれた家族に対する支援は全くなく、本人のみならず家族の

心身もズタズタに追い詰められています。

陰性症状とは、薬物治療により、しばらくの間動けないままに無為に過ごす時期だと主に言われていますが、治療期間が長くなるにつれて、家庭内で固まった状況になっている人も、発症時から陰性症状が激しい症状の人も、重度の陰性症状と言えらると思います。

根気良く家庭に介入し、本人の気持ちに寄り添った対応を続けて、その心を開き、もう一度元気を復活させるためには、かなり手厚い対応が求められます。現在は、あまりにも地域資源が不足し、医療を受けた後での対応が貧しく、ほとんど家族に委ねられている為に、家庭内に引きこもった状態で、本人家族共に何年間も無為に過ごしています。初期における、素早い、途切れることの無い、きめ細かな対応が得られれば、多くの精神障害者は早期に回復して、就労や学業復帰までもが叶い、社会参加が今以上に期待できます。

まだまだ薬開発に頼る治療の為、長期薬物治療により薬による副作用に悩まされ、安定的な症状にもかかわらず身体不自由に陥っている人、多剤服用になり内科的治療が必要になり治療困難に陥る人など、適正に薬が体に合う人ばかりではありません。新薬開発・認可も急がれます。また近年副作用が大きい人に精神療法や本剤を服用しながらのサプリメント治療などがありますが、保険がきかないため、良いとされていても金銭的負担が大きい為、治療に踏み切れず我慢せざるを得ないのが現実です。必要としている人に保険適用を急いでください。

病気の初期における手厚い支援とは、医療に特化した訪問治療や支援ではなく、地域に根差した医療と福祉との連携による訪問支援です。その対応からは、信じられないほどの回復がなかった人もいます。それは、大きな費用対効果としても期待できるといわれています。

本人達は、「税金が払えるような人になりたい」とよく言っています。そのような人になりたいのです。家族はもちろんです。人として社会の役に立ててこそ、地域で生きていると言えるのではないのでしょうか。それは社会的コストの面からも、合理的配慮の面からも大事な視点だと思います。

長期間無為に過ごした中で培われた自尊心の喪失こそ、家庭の奥底に隠れて過ごす本人が抱える大きな問題だと捉えて、早期からの切れ目のない手立てを是非お願いします。ワン・ストップの相談により、家族の訴えをしっかりと受け止めて、個別状況をしっかりとアセスメントにより把握して、個々の状況に応じて、その支援に関わる事こそが、家族の視点から見て一番有効な、理にかなった支援策だと思います。

サテライト型住居支援について

現在家族と同居している精神障害者は、親亡き後もその家屋に住み続ける場合があります。音に過敏な場合は、グループホームでの共同生活にはなじみません。親亡き後に1人暮らしを続ける場合に、グループホームのサテライト住居として、同じ支援が受けられる方策も、是非検討して下さい。